２．水郷潮来あやめ祭り

（１）あやめ園とあやめ祭りの歴史

戦前まで水郷潮来は、あやめ園をはじめとして潮来十二橋など水郷情緒を楽しめる観光地として賑わっていました。しかし、第二次世界大戦中には、あやめ園は水田と化し、旅館も疎開学童の宿舎とされるなど、観光地としての姿を失っていきました。

戦後、荒廃したあやめ園は、昭和２５年（１９５０年）寄付によって花菖蒲の苗を購入し、復興へ歩みを始めました。再び観光客も戻り始めましたが、地元ではより発展をめざして国立公園の指定を目標に期成同盟を結成し、国会への請願などの運動が始まりました。運動と並行して、あやめはもとより柳やポプラ、桜を数千本植樹するなど、公園としての環境整備を進めました。昭和３４年３月３日に「水郷国定公園」が全国２０番目の国定公園として指定されました。（その後筑波山等を加え昭和４４年水郷筑波国定公園となりました。）昭和３１年に前川の旧水雲橋の近く（潮来ホテル前）に町と鹿島参宮鉄道（現関東鉄道（(株)）とであやめ園が開園され、昭和５１年からは当時の潮来町の管理となり現在に至っています。現在では約１．３ｈａの敷地に約５００種、１００万株の色とりどりのあやめが咲き誇る景勝地となっています。

あやめ祭りの風景

あやめ祭りは昭和２７年（１９５２年）に始まった歴史ある祭りで、当初は愛好家たちがビール瓶などに花菖蒲やアヤメの切り花を入れたり、鉢植えを持ち寄って行われていました。その後あやめ園が開園し整備が進み磯山邸、津軽河岸等も整備されました。

開花に合わせ毎年５月下旬から６月下旬にかけて開催され、期間中は昭和３５年（１９６０年）に花村菊江の「潮来花嫁さん」にちなんだ「嫁入り舟」や伝統芸能の「あやめ踊り」などさまざまなイベントが行われます。夜には園内がライトアップされ、昼間とは違った幻想的な雰囲気を楽しむことができます。また、昔は人々の足として使われていた「ろ船」も運行し、水郷地帯を流れる前川で遊覧を楽しむこともでき、毎年期間中に多くの観光客が訪れています。（各種イベントは毎日ではないので確認を要します。）

（２）アヤメ、カキツバタ、花菖蒲の説明

①アヤメ

アヤメは山野の草地に生えます。葉は直立し高さ４０～６０㎝程度。５月ごろに径８㎝ほどの主に紫色の花を付けます。外花被片（前面に垂れ下がった花びら）には網目（虎斑）模様があるのが特徴で、本種の和名のもとになっています。花茎は分岐しません。

北海道から九州まで広く分布します。古くは「あやめ」の名はサトイモ科のショウブを指した語で、現在のアヤメは「はなあやめ」と呼ばれました。なお、「いずれがアヤメかカキツバタ」という慣用句があります。どれも素晴らしく甲乙付け難いという意味でありますが、見分けが付き難いという意味にも用いられます。

②カキツバタ

カキツバタは湿地に群生し、５月から６月にかけて主に紫色の花を付けます。内花被片が細く直立し、外花被片の中央部に白い線状の斑紋があることなどを特徴とします。江戸時代の前半にはすでに多くの品種が成立しており、古典園芸植物の一つでもありますが、江戸時代後半には花菖蒲が非常に発展して、カキツバタはあまり注目されませんでした。現代では再び品種改良が進められています。

漢字表記の一つ「杜若」は、本来はヤブミョウガという別種の漢名（「とじゃく」と読む）でありましたが、カキツバタと混同されたものです。

③花菖蒲

花菖蒲はノハナショウブの園芸種です。６月ごろに花を咲かせます。花の色は白、ピンク、紫、青、黄など多数あり、絞りや覆輪などとの組み合わせを含めると５，０００種類あるといわれています。外花被片の中央部に黄色の斑紋があり、大別すると江戸系、肥後系、伊勢系の３系統に

分類でき、他にも原種の特徴を強く残す山形県長井市で伝えられてきた永井古種があります。近年の考察では、おそらく東北地方でノハナショウブの色変わり種が選抜され、戦国時代か江戸時代初めまでに栽培品種化したものとされています。これが江戸時代に持ち込まれ、後の三系統につながりました。長井古種は江戸に持ち込まれる以前の原型を留めたものと考えられています。

その他、特にアメリカで育種が進んでいる外国系があります。菖蒲湯に使われるショウブは、ショウブ科またはサトイモ科に分類される別種の植物です。

アヤメ

カキツバタ

花菖蒲

アヤメ、カキツバタ、花菖蒲の見分け方

種別	花の色	葉	花の特徴	適地	開花期
アヤメ	紫、まれに白	主脈不明瞭	外花被片に黄色い網目（虎斑）模様がある	乾いた所に育つ	5月上旬から中旬
カキツバタ	青紫のほか紫、白等	主脈細小	外花被片に白ないし淡黄色の線状斑紋がある	水中や湿った所	5月中旬から下旬
花菖蒲	白、紫、ﾋﾟﾝｸ、水色、黄等	主脈太い	外花被片に黄色の線状斑紋がある	湿った所に育つ	5月下旬から6月下旬

（参考）花菖蒲の歴史的系統

①江戸系

江戸では花菖蒲の栽培が盛んで、江戸中期頃に初の花菖蒲園が葛飾堀切に開かれ、浮世絵にも描かれた名所となりました。ここで特筆されるのは、旗本松平定朝（菖翁）です。６０年間にわたり３００近い品種を作出し名著「花菖培養録」を残し、花菖蒲栽培の歴史は菖翁以前と以後で区切られます。こうして江戸で完成された品種群が日本の栽培品種の基礎となりました。

②肥後系

肥後熊本藩主細川斉護(なりもり)が、藩士を菖翁のところに弟子入りさせ、門外不出を条件に譲り受けたもので「肥後六花」の一つとなっています。菖翁との約束であった門外不出という会則を厳守してきましたが、大正時代にこれを売りに出した会員がおり、瞬く間に中心的な存在になりました。ゆるぎない品格を備えた花は武士道精神の表れであり、まさに武士（もののふ）の花です。鉢で作り室内で鑑賞します。

③伊勢系

伊勢松坂の紀州藩士吉井定五郎により独自に品種改良されたという品種群で「伊勢三品」の一つです。昭和２７年（１９５２年）に「イセショウブ」の名称で三重県指定天然記念物となり、全国に知られるようになりました。垂れ咲きの三英花が特徴です。男性的な熊本花菖蒲に対して繊細な女性的な美しさに溢れています。

④長井古種

山形県長井市で栽培されてきた品種群です。同市のあやめ公園は明治４３年（１９１０年）に開園し、市民の憩いの場でありました。昭和３７年（１９６２年)、来訪した中央の園芸家によって三系統いずれにも属さない品種群が確認され、長井古種と命名されたことから知られるよう

になりました。江戸後期からの品種改良の影響を受けていない、少なくとも江戸中期以前の原種に近いものと評価されています。長井古種に属する品種のうち１３品種は長井市指定天然記念物です。

（３）嫁入り舟

嫁入り舟の歴史は江戸時代までさかのぼります。江戸時代水運の要衝であった潮来は水路によって形成された生活形態であったことから、嫁入りする際の花嫁や嫁入り道具を運搬するときにも、ろ舟が使われており昭和３０年代前半まで続きました。

この嫁入り舟が全国的に知られるようになったのは、昭和３１年１０月に松竹映画「花嫁募集中」とタイアップして“ミス花嫁”を募集したことと、昭和３５年に花村菊江さんの「潮来花嫁さん」の大ヒットにより多くの人に知られるようになりました。しかし、生活形態や交通手段（水運から陸運）の変化から河川や水路（江間）も姿を消してしまい、昭和３０年代前半で「嫁入り舟」を見ることが出来なくなりました。

このような中、昭和６０年に行われた「つくば国際科学技術博覧会（潮来の日）」の際に、イベントとして「嫁入り舟」を復活させたのがきっかけとなり、現在のあやめ祭りにおいても行われるようになり、今では水郷潮来を代表する行事となりました。

【多くの見どころ！】

花嫁さんは、介添え役（主には花嫁の御両親）と磯山邸を出て津軽河岸で嫁入り舟に乗りあやめ園へと出発します。前川沿いでは橋や川の両側から沢山の人たちの祝福を受けながら進みます。北利根川の合流地点にある水門橋の手前でUターンし、ろ舟乗り場で花婿が花嫁を迎えます。ろ舟乗り場を出たところでお二人は、多くの観光客の皆様に迎えられ、あやめが咲き誇る中を長持ちを先頭にゆっくり東屋から雨情橋経由で花村菊江像の近くまで歩みます。花村菊江像横の土手上で花嫁、花婿、介添え役の４人並んで祝福して頂いた皆様に黙礼をして記念撮影をします。多くの人たちに見送られ花嫁と花婿、介添え役のお二人夫々人力車に乗り磯山邸に戻ります。

嫁入り船津軽河岸出発～前川の嫁入り舟運行～あやめ園到着後のセレモニー～人力車出発まで約４５分、見どころ満載で必見です。

花嫁に会えるまち、水郷潮来はきっと皆さまに幸せを感じて頂けると思います。

【あやめ祭り期間中嫁入り舟開催日】

水曜日…11:00
土曜日…11:00、14:00、
　　19:30（宵の嫁入り舟）
日曜日…11:00、14:00

あやめ祭り時の嫁入り舟

（４）十二橋めぐり

水郷地帯はかつては水路が縦横に張り巡らされており、人家と人家を行き来するためにひと一人がやっと通れるような小さな橋が架けられました。このような橋が１２あったので十二橋と呼ばれていました。十二橋めぐりにはこのような小さな橋をめぐる「加藤洲十二橋めぐり」と歴史の新しい「前川十二橋めぐり」とがあります。さっぱ舟と呼ばれるろ舟に乗ってたっぷりと水郷情緒を味わうことが出来ます。

【前川十二橋めぐり】

水郷潮来あやめ祭りの会場である、前川を運行します。前川十二橋の歴史は新しく昭和５３年６月に遊覧船の運行が始まりました。一時休止をしていましたが昭和５９年に水郷情緒の復活を求めた商工会青年部により、ろ舟運行が再開され、遠来の観光客はもとより地元の人たちにも人気となりました。前川十二橋は北利根川から順に前川水門橋、あやめ橋、雨情橋、思案橋、水雲橋、潮音橋、天王橋、出島橋、まこも橋、千石橋、上米橋、前川橋の名がつけられています。

【手漕ぎろ舟前川十二橋めぐり運賃】

コース	大人	子供（小学生）
３０分	１人 １，３00 円	一人 ７00 円

２０２４年料金改定（税込み）

【エンジン付き舟前川十二橋めぐり運賃】
３０分コース
４名まで一艘６，０００円
５名以上１名１，５００円
２０２４年料金改定（税込み）

ろ舟前川十二橋めぐり

【加藤洲十二橋めぐり】

茨城県潮来市と千葉県香取市の県境を流れる常陸利根川の南岸にある加藤洲水門をくぐり細い水路を運行します。古くから水郷の名勝、定番の水郷観光スポットとして知られ、地区内を流れる新左衛門川の両側に並ぶ家と家を結ぶ一枚板の簡単な橋が１２架かっていたので十二橋と呼ばれています。

【加藤洲十二橋めぐり運賃】　６月中は一方通行のためＡコースのみ運行

コース	個人４名まで	個人５名以上
A (70 分)	１艘 8,000 円	１名 2,000 円
C (40 分)	１艘 6,800 円	１名 1,700 円

２０２４年料金改定（税込み）

加藤洲十二橋めぐり